

豎穴ノ遺風今尚各地ニ存セル力

——サケを「待つ」漁小屋の存立と漁撈

技術・漁場使用慣行の相関について——

菅 豊

-
- | | |
|-----------------------------|---------------|
| 1 「小屋」とは何か | 4 「待つ」漁業とサケ小屋 |
| 2 伝統的サケ小屋の基本形態 | 結語 |
| 3 サケ小屋の成立と漁法、漁場使用慣行との
相関 | |
-

論文要旨

本稿で取り扱う小屋は、主屋近接型と主屋遠隔型の中間にあたるものである。それは漁撈（特にサケの内水面漁撈）にともなうもので、主屋との距離は比較的近いにもかかわらず、その居住性は高く、特定時期のベースキャンプとなっている。しかし、定住し小屋を主屋化することはない。本稿ではこの伝統的サケ小屋の基本形態、そして、その生成、維持、利用形態について、サケ漁という特殊な技術、漁場使用などの実際の活動が、いかなる影響を与えているか考察する。

サケは冬の寒期に限定して捕れる魚種なので、サケ小屋には堅穴形式や、小屋脇に土盛する技術など保温、防寒の工夫が施されている。また、いずれも簡便で仮設性に富んでいる。これはサケの漁法や漁場使用慣行と密接に関わっており、おおむね漁法が小型で、固定的であり、個人的な漁撈活動を営む形式——「待つ」漁業——に、このような小屋が付随する。ヤナなど固定的な漁法であっても、多くの人数で行う集団漁の場合は、小型のサケ小屋では間に合わなくなり、常設的な大型の構造物を持たざるをえない。また漁場的には漁区割り制度などでもって、各漁撈従事者が個別的なテリトリーを1シーズン中占有するが、翌シーズンには必ずしも同じテリトリーを占有できるとは限らないような漁場使用の場合に、一般的にサケ小屋が構築されるといえよう。「待つ」漁業の持つ、シーズン中の固定性と、シーズンごとの移動性という性質が、小型の非恒久的構築物を必要とするのである。サケ小屋は「出作り小屋」や、マタギの「狩り小屋」のように、居住する集落からの遠隔性により成立した建築物ではなく、漁撈活動に関わっている時間の間欠的連続性により、希求された建築物であるといえる。寒気の中、長時間の待機が要求される状況がこの小屋を発生させたともいえる。